

米正雄―伊達崎村に残した八文字（福島民報大正十四年十二月二十三日付）などがある。

仙子と百合子 本県出身の女流作家としては水野仙子と中条百合子（後の宮本百合子）をあげなければなるまい。さきにあげた柳沢健は明治二十二年生まれだが、仙子は年譜によると明治二十一年（一八八八）十二月三日、須賀川市に服部直太郎の三女として生まれている。歌人として知られている服部躬治はその兄。後年、川浪氏と結婚して本名は川浪てい子、小学校から土地の裁縫学校を出ただけという学歴だが、『女子文壇』や『文章世界』に投書しているうちに明治四十二年二月『文章世界』に「徒労」が発表され田山花袋の激賞を受けた。『文章世界』は博文館から出されて田山花袋が主宰していた。その縁で四月上旬上京して花袋の門にはいる。やがて「青踏社」に属する新進作家として大正二年（一九一三）ころから制作活動も盛んになるのだが、大正五年肋膜炎にかかってから健康すぐれず、大正八年（一九一九）五月三十一日病没、数え年三三。花袋をたよって上京してから一〇年にしかない。須賀川市十念寺に分骨埋葬されている。翌九年『水野仙子集』が花袋の序文、有島武郎の跋が添えられて出版されている。河出版の『現代日本小説大系』には「輝ける朝」（大正七年二月・中）と「十六になったお京」（大正六年六月）が収められていて、片岡良一が次のような解説を書いて有島の文章を引いている。

（前略）要するに花袋に育てられ、青踏社時代にはある程度唯美派風の作風にも傾いたりしたあげく、白樺派の理想主義にひきつけられて行った作家と見られる。……代表作「道」は大正六年十二月の読売新聞に発表された、武郎の跋文の一節「道」の如きはあれ一つだけで仙子氏の芸術家としての存在を十分に可能ならしむるに足ると思ふ。……そこには確かに生命の裏書きのある情景がある。それは単なる諦観ではない、壊れるものを壊し終った後に厳然として残る生活への肯定である。（後略）

また筑摩版の現代日本文学全集の『大正小説集』には「嘘をつく日」（大正七年二月）が収められている。ついでに福島新聞の大正九年八月六日付の「水野仙子 正田刀水」という文章を次に抄記しておこう。

その仙子から一〇年おくれて明治三十二年（一八九九）二月十三日に中条百合子が東京小石川に生まれている。父は精一郎（後に工學博士）、祖父は安積開墾の恩人とされる政恒、その縁故で百合子は小さい時から毎年祖母のいる桑野村（現在の郡山市）に遊びに来ていた。そしてその周辺の農民の印象を集めて書いたのが処女作の「貧しき人々の群」で坪内逍遙の推薦で大正五年（一九一六）九月の『中央公論』に発表された。時に百合子数えて一八歳。この祖母の住んでいた家のことなどは戦後書いた『播州平野』などにも出て来る。大正七年には単行本『一つの芽生』が新進作家叢書の一つとして新潮社から出版されている。最初の結婚に敗れた百合子はロシアに遊学する。そしてはっきり無産派の文学者として立

またその三月前、同紙の五月二十六日付に「師として可哀そう 一周忌近づく 水野仙子を 花袋氏語る」と一段見出しの記事がある。その中で

お貞さんが始めて私の家に来たときは二十二才のほんとに純な田舎の処女と云った風な人でした……

と花袋に語らせている。

「神様 この御飯を 有難うございます」
読売紙上に死後発表された「貧しき病人のうた」を繰返しては何とは知れず涙ぐんだものである。

私が彼女を知ったのは中学三、四年のときであった。ある不思議な芸術の迷宮のように其当時思つてゐた文章世界を抱いて野路を通う小さな色白のさみしい中学生が思ひ出せる。そして私は其雑誌に投書して花袋や誌友にちやはやされてゐる水野仙子といふ女を種々に考へてみた。雪の降る風の寒い淋しい村にちつとなにかを考へてゐる女、どんな伶俐そうな顔をしてゐるのだろう。それともまたあの作品に見るやうなやさしい温かい……そんな風に考へながら、学校に通つていた私……

赤い四角に剥げた塗膳に

夕べの御飯が運ばれた

いきのたつ味噌汁に

ころころとお膳をころげ廻る生玉子

それから色のよいお香のもの

水野 仙子

南北と小平次

枯田 淨

山口 草平 畫

北と松助

写真右は現代日本文学全集『大正小説集』に収められている水野仙子（大正八年病没）

左は昭和八年十一月の『サンデー毎日』に掲載された枯田淨の「南北と小平次」（昭和二十七年病没、三五三ページその他参照）



つようになり、後に宮本顕治と再婚して、宮本姓を名のるのである。

百合子は四年にわたって雑誌『展望』に連載した三〇〇枚の長篇『道標』を書き上げた翌年、昭和二十六年（一九五一）一月二十一日、次の新作にとりかかろうとしている時惜しくも突然世を去った。満五五歳。

善太郎・賢助・隈畔ら 大正七年（一九一八）二月二十三日付の福島新聞に「幻想を読む 雲心閣日記」というのが出ている。雲心閣というのは福島新聞の理事、蒼郊天野市太郎の別号だが、次のように書いている。

「幻想」は鈴木善太郎君の近著にて短篇小説集なり「剃刀のファンタジア」「ある男の遺書」「太田黒権十郎の抗議」「二百八十九」等の五篇を収む。内「二百八十九」は曾て東方時論に発表せしもの、他は皆新作なりといふ。君は其朝日新聞記者たりし頃より、イヤずつと其以前より「秋風」と号したり、此書も多分「秋風著」とあるべく予期せし処、生れし時親に貰ひたる「善太郎」を其儘に用ひたり。之が本統の道にて喜ばしき事なり（後略）

また同紙二月二日付の「眼前口頭」欄に

久米正雄だの鈴木善太郎だの中条百合子、水野仙子、古い所では後藤宙外など本県に縁の深い創作者や劇作者が出てから、「福島県」の風物も大分描かれて居り

などの文字も見えている。鈴木善太郎は久米正雄と同じ安積中学（現安積高校）の出身。万朝報の懸賞小説に「山荘の人々」が当選、大阪朝日の映画劇台本に「天と地」が推薦作となったり、福島民報には昭和二年（一九二七）の下期に「愛の試鍊」が約半歳連載されたりしている。また第一書房から「モルナアル」の翻訳を出しているが、昭和二十年（一九四五）春、郷里郡山に疎開したまま県文学賞の審査委員などを勤め、二十五年五月病没。（二八八三）
「寄合話」（福島新聞大正十一年六月十五日付）に秦賢助の名が出ている。そして

鎌田村の農家の次男坊、某新聞の校正係日大の聴講生、昨年の十月「講談クラブ」秋季増刊号に「生野の女」で二等二百円、沢田博士の「性」の春季号で芸術小説で三百円、「万朝報」の日曜小説も二回で二十円

などとするされている。秦賢助は「哀美」と称して福島新聞や福島民友、福島民報などにもしばしばその名を見せて

福島県史
第20巻 各論編 6
文化 1
定価 二、四〇〇円
発行 昭和四〇年一月三〇日
編集・発行 福島県
福島県内発売元
福島市舟場町一の二七
福島県図書教材株式会社
福島県外発売元
東京都千代田区神田神保町二の二
有限会社 巖南堂書店
印刷所
福島市陣場町九の三
小浜印刷株式会社